

「次世代脳」プロジェクト 冬のシンポジウム 2021 アンケート結果

(回答 80 名)

1. あなたの所属を教えてください

大学・大学共同利用機関等の常勤職員 / 51

その他の非営利の学術研究機関に所属する常勤職員 / 7 大学院生 / 9

学部学生 / 4 企業 / 1 病院 / 2

その他 (NICT の協力研究員 / 1・その他の非営利の学術研究機関に所属する非常勤職員 / 1・

大学客員研究員 / 1・大学研究所フェロー / 1・大学非常勤職員 / 1・大学客員教員 / 1)

2. 参加した日程をお答えください

12月15日 グリアとニューロン：機能調節とその可塑性 / 36

12月16日 脳情報動態・時間生成学・超適応 –若手研究者合同シンポジウム– / 37

12月17日 学術変革領域研究 (A) の紹介 / 34

12月17日 日本の神経科学 ～温故知新～ / 41

12月18日 基礎神経科学と臨床精神が融合したブレークスルー研究の育て方 / 23

シンポジウムに参加していない / 7

3. 参加したイベントのうち有意義と思われたイベントはどれでしたか

12月15日 グリアとニューロン：機能調節とその可塑性 / 31

12月16日 脳情報動態・時間生成学・超適応 –若手研究者合同シンポジウム– / 29

12月17日 学術変革領域研究 (A) の紹介 / 28

12月17日 日本の神経科学 ～温故知新～ / 35

12月18日 基礎神経科学と臨床精神が融合したブレークスルー研究の育て方 / 19

シンポジウムに参加していない / 7

4. シンポジウム開催について

是非継続して欲しい / 71 どちらでもよい / 8 必要性を感じない / 1

5. シンポジウム開催時期について

今年度と同じでよい / 79 その他 (まだ大学業務がある1月頃まで / 1)

6. ポスター発表について

是非開催して欲しい / 31 どちらでもよい / 42 必要性を感じない / 7

7. 「次世代脳」シンポジウムを開催した場合、どちらの方法で参加したいですか

オンラインでの参加を希望する / 46 対面での参加を希望する / 34

8. プロジェクト（シンポジウム開催、その他の取組）に関して、ご意見・ご感想があれば、ご記入ください

- ・温故知新のみの参加でしたが、各先生方のお話に感銘を受けた。
- ・本年の内容は多面的で、基礎知識も、それらを互いに結合させた視野も広まった点がとてもありがたかった。（但し「日本の神経科学～温故知新～」は、専門外の私はいわば「へえー」というスタンスで拝聴し、個人的にはよくわからなかった。ですが、それなりに知識と経験がある皆様には、論文でいえば先行研究にあたる、知識がぶ厚くなると申しましょるか、有用かつ貴重な場であろうと思った）
- ・次世代脳と謳いつつ、演者はいつもの学会シンポジウムや班会議と同じ面々で次世代感がなかった。演者を単独での発表経験が少ない若手主体にするくらいで良いと思う。
- ・こういった講演はシニア研究者が主流であったり、複数のイベントにおいて講演される方が固定化して、新たな視点がないことが気になっている（もう少し多様なお話を聞きたいです）。講演者を選ばれる際にあるトピックで思いつく上位 3 名くらいを除外して選出されるとか、脳科学の今後に関する議論はシニア研究者が意見を述べるだけでなく若手（院生・ポスドク）との対談など企画されると、若手が主体的に参加できると思う。
- ・新しく新学術領域等が発足した時の公募に対する説明会を次世代脳で総合的に行う等すると多くの方が聞きやすいと思う。
- ・午前にあったり、午後にあったりで日程がわかりにくい。たまたま所用と重なり、ほとんどの日程に参加することができなかった。オンラインの良さが活かせていないように思う。
- ・対面での開催になったとしても、シンポジウムだけはオンラインなど教務など他の業務と重なった際にも参加しうるように配慮いただけるとありがたい。

9. 脳科学研究をこれから更に推進するために必要な要素はどれでしょうか（複数回答可）

常勤職員の増員 / 59 ポスドクの増員 / 25 大学院生の増員 / 30
補佐員の増員 / 23 ポスドクとその教育の質の向上 / 28
大学院生とその教育の質の向上 / 35 補佐員とその教育の質の向上 / 14
国内研究者間の研究交流 / 40 国際的な共同研究 / 28 大型研究拠点の充実 / 16
支援拠点の充実 / 30 支援の種類の多様化 / 36 民間企業との連携 / 14
より基礎的な研究の充実 / 43 出口の見える応用研究の奨励 / 6
一般向けの科学コミュニケーションの推進 / 13 教育研究以外の雑用を減らす努力・工夫 / 35
安心して研究に打ち込める環境作り / 56 異分野交流・共同研究の推進 / 14
多様な研究者の意見を取り入れる仕組み / 34 研究成果の社会への還元 / 16
英語使用の推進 / 9 評価・審査時の利益相反排除の徹底 / 12

10. 脳科学研究の将来の発展に重要と思われる要素について自由にご意見をお書きください

- ・ 今後の研究を担う若手研究者の育成
- ・ 研究者がよく考えて、独創的な研究を行うよう心掛けることが重要だと思う。
- ・ 若い人が長期間安定して研究を続ける環境の拡充が最重要である。
- ・ 常勤研究員の増員以外に、日本の科学を救う道はない。
- ・ 地方大学における研究環境（特に人員）の整備・改善
- ・ ヒトを対象とした認知神経科学・システム神経科学分野の基礎研究者の人材育成と増員
- ・ 大学以前の若手への脳科学研究の啓蒙
- ・ 若手研究者がシニア研究者に対して、忖度なく意見できる環境。
- ・ 給与の充実、雇用の安定
- ・ 研究に没頭できる時間の確保
- ・ 基礎的な研究を支える出口を指定しない比較的長期の研究費の充実や大学院生を確保するために、生活費の補填を含む思い切った経費の投入
- ・ 集中投資よりも、若手・シニア関係なく広く研究費を配っていただきたい。
- ・ 若手と女性研究者への先行投資
- ・ シンポジウムや研究会などのイベントをいたずらに増やさず、研究そのものに打ち込める時間を少しでも多く確保できるように努力するべき。

- ・スタッフ不足、時間不足により、臨床研究が年々できない環境になっている。倫理書類申請も複雑で体制を確立することすらままならない。予算獲得や共同研究の立ち上げたいという意欲があっても、一施設だけで研究実現がより困難になっている。現状では、より小規模な研究を確実に行うことしかできない。異分野交流を促進するために、このような複数の大学による交流があることが研究のモチベーションの維持・向上につながる。今後も是非、このようなシンポジウムを継続してほしいと思う。
- ・共用のリソースの充実（ベクターコア等）、遺伝子組み換え動物の自由な使用（導入コストの低減）、薄く広い支援（大艦巨砲主義からの脱却）、オープンソース研究（若手でも工夫次第で成果が出るように）
- ・他分野の発想が二ト口になることもあるので心理学や精神医学、神経生理学から文化人類学まで今まで以上に多様性のあるメンバーを選んで欲しい。（もちろん大枠は大事なので脳科学という括りは必要だが）
- ・情報科学との融合
- ・大学教員公募が未だ旧来の学問の枠組みにとらわれているものが多い。脳科学は学際研究の最たるものであると思うので、学際的な活動を積極的に行っている教員公募をもっと充実させる方が脳科学の発展にも寄与するのではないか。
- ・脳科学研究内での多様性。対象とする脳領域や機能は異なっても、研究手法などは似たり寄ったりのラボが乱立しているのはいかがかと思われる。
- ・1.コホート研究(新規の特性などが、不特定多数の人に該当するのか、何らかのマイナーな事象の影響なのか、それも covid 19 感染の影響の様に非可逆的な物かを検討する上で)
- 2.エピジェネティックについて、日本の熟年層、青年層、生徒・児童やそれ未満の層で臨床的な有意差があるのか調べることで、例えば臨床的な困難（神経発達症や大うつ病性障害や統合失調症などや、認知症）を増悪させず減弱を目指す上で、一次～三次的な予防に奏功するのではないかと考えるので。
- ・脳科学関係の大型予算はどうしてもいつものコミュニティで回しているようにしか見えない。評価委員も代表や班員と非常に関係性が深く、客観的な評価が成立しているとは思えない。また、大型予算を複数確保する研究者が同じ論文を異なる研究領域・プログラムにて成果として報告することが常態化しているように、各予算の独立性は事実上存在しない。そのため、脳科学分野で複数の異なる大型予算が組まれても、出てくる成果は proportional に増えない。現状で日本の脳科学研究が発展する理由は見当たらない。そういうことが良くわかるという意味では、現行の次世代脳シンポジウムは有用だと思う。

・脳科学研究に限らないが、「人生を研究に捧げる、捧げなければならない」というオブセッションのようなものを植え付けるのをやめて、かつ博士号を持っていることがもう少し社会的に評価されるようにしなければならないと思う。博士持ちが（きっと優秀な人材であろうと前提として信じたうえで）もう少しその実力を社会で評価されるための素養を身につける（disguise でもよいので）機会を設ければ、常勤ポストが限られていても、「人生の一時期を研究に投じた」「いい経験となって、キャリアにもつながった」という形で、研究者の卵が抱えている今のような悲壮感はなくなるのではないかと思うし、参加してくれる人が増えれば、研究室の労働力不足も解消されるだろう。他業種で博士持ちの給料が上がるように、政府でも経団連でも何でもいいので色々なチャネルから働きかけていく、そして我々としてもそういった人材を、優秀な人材に博士を与えて、離れることにネガティブな印象を持つのではなく積極的に世に送り出していくというのが有効な方向性と思う。そうすることで、大学の研究セクターがそういった研究人材のインキュベーターであることを社会的に認知させ、確立する。ただし、大学だってただで人材育成できるわけではない。雇用にかかるお金が必要なのであるから、研究費を増額してもらおう、という流れが自然ではないかと思う。なんにせよ今の研究費だと基盤 B クラスでは大学院生の RA や技術員の給料を支払うと雀の涙ほどしか残らない。研究員なんて雇いようがない、こんな研究費配分で何を進められると配分する側が思っているのか、疑問である。基盤 C や基盤 B では人が雇えないということを前提に、研究に専念させてくれるなら、まだよいだろうけど、実際にはそういった人たちも雑用はそこそこあって、自分が手を動かして研究するにはなかなか時間が足りないという事情があると思う。

まとめると、博士やポスドクは人生の通過点なので、どんどん社会に出て活躍してね、という雰囲気を作り、人材育成は大学の手柄だ、と社会に認知されることが今後の研究発展のために必要と思う。（逆に言えば昭和－平成で全く逆の社会的な認知が成立してしまっていることが現状の遠因なのだと思う）。